

デザインワークショップでの共創

ー参加者のセミオティック資源の使用と協働の複雑性に注目してー

頼 欣宏 (慶應義塾大学)

1. はじめに

本研究では、デザインワークショップに参加する異なる言語・文化背景を持つ参加者を研究対象として、アイデアの発想における相互行為を分析・考察する。また、国際交流やグローバル・デザイン教育の推進を目的としたデザイン・ワークショップを「グローバル・デザイン・ワークショップ (以下, GDWS)」という名称で記す。近年, GDWSは大学のデザイン学科によって積極的に開催されていて (千葉工業大学2020), 「英語でスムーズに取り組めること」を参加条件として書かれている大学 (武蔵野美術大学 2023) がある一方, 筆者自身は互いの共通言語が少ししか通じないGDWSに参加したことがある。言語資源はGDWSの運営における重要な要素だと思われるが, デザイン学の研究ではそれについて議論することがあまり見られない。GDWSの価値をより発揮するためには, 参加者の多様な言語・文化背景などの要素に着目する必要があると考えられる。

2. 先行研究

デザイン領域の研究では, 一般的なデザインプロセスに則り, プログラムを設計した後, デザイン・ワークショップなどの実践を通じて検証を行うというような研究が行われている (東南・安斎2020)。一般的なデザインプロセスについて, ダブルダイヤモンド (Design Council2019) という課題解決するためのフレームワークは2004年にイギリスのDesign Councilによって導入され, デザイン領域で世界的に広く使われている (Design Council2019)。本研究では, デザインプロセスに参加している人々による創造活動を「共創」と定義する。デザイン領域の視点だけを用い, GDWSの共創について議論する場合, 参加者はデザイナーあるいはデザインプロセスと関連するアクター (行為者) として捉えられやすく, 各参加者の言語・文化背景に注目することは困難である。

社会言語学などの領域では, 言語・文化背景についての議論はすでに多くの研究を通じて行われている。ワタナベ (Watanabe 1993, pp. 176-209) は, フレームの概念を使い, グループ討論における日本とアメリカの違いを分析した。フレームは, ゴフマン (Goffman 1975, pp. 10-11) が使いはじめ, 後にガンパーズ (Gumperz 1981, pp. 323-334) の研究で会話参加者が相互行為のできごとを適切に解釈できるように導くものとして用いられた。社会言語学の概念を利用すれば, GDWSにおける参加者の相互行為について, 言語・文化背景の要素に注目して, 「〇〇語の話者はこのように共創している」という発見に至ることは可能である。しかしながら, このような発見がGDWSの共創における新たなステレオタイプを生み出し, 共創の可能性を狭める恐れがあることも考慮すべきである。「〇〇語」という言語観と関係なく, 参加者の言語・文化背景, デザイン学の知見を包括した視点での議論が必要である。

そこで, メトロリンガリズム (Pennycook & Otsuji 2015) の概念に注目したい。メトロリンガリズムとは, バイリンガリズム・コードスイッチング・マルチリンガリズムといったような人に帰す能力という概念と異なり, ことばの多様性を言語資源が複雑に絡み合う総体として捉えるアプローチである (尾辻 2016)。メトロリンガリズムには, 「複数同時活動」と「場のレパトリー」という二つの中心的概念があり, 「複数同時活動」は様々な資源と複合的に複数の活動に従事していることを指し, 「場のレパトリー」は, 個と他の会話の参加者のレパトリーのみならず, その場にある種々の資源を擦り合わせながら複数同時活動する中で生まれる場の資源の総体とする (Pennycook&Otsuji 2014, 尾辻 2016)。

尾辻 (2016) は, 具体的な会話例を取り上げて, メトロリンガリズムにおける「複数同時活動」と結びつけて分析を行った。分析では, レストランの経営者が様々な背景の人と関わり, 物質的資源 (メニュー, お皿など) を媒体とし, 多種多様な言語資源を駆使して複数のタスクを同時にこなす過程を記述した。「場のレパトリー」についての分析では, ことば, ジェスチャー, その場にある物質的資源を駆使して会話する話者の様子が記述され, 会話やことばはさまざまな資源の集合体であり, 個人に属するものではないという視点に辿り着いた (尾辻 2016)。さらに, 尾辻 (2021) は, メトロリンガルと生態学的な視点を用いて, 多種多様なセミオティック資源にアクセスしながら日常生活を営む大学生のデータを分析した上で, 言語資源もセミオティック資源も含む多様な資源が生態的に絡み合っている総体が「ことば」であるという考えに基づく言語イデオロギーを提案した。

3. 研究の目的と方法

3.1. 研究の目的とリサーチクエッション

本研究では、デザインプロセスに参加している人々による創造活動を「共創」と定義し、メトロリンガリズムの視点を援用し、GDWSの参加者はどのようなセミオティック資源を用いて、どのように共創するかを研究課題として追究する。その上で、今後GDWSを運営する際の示唆を得たい。

3.2. メトロリンガリズムの視点を援用した分析の方法論

分析方法論として、メトロリンガリズムの中心的概念である「複数同時活動」や「場のレパートリー」と結びつけながら、共創のためにGDWSの参加者が使用した言語資源の多様性についての議論を展開する。さらに、言語資源もセミオティック資源も含む多様な資源が生態的に絡み合っている総体が「ことば」という考えに基づく言語イデオロギーに則り、GDWSの参加者がどのようなセミオティック資源にアクセスしながら共創しているかについて、断片を取り上げて分析していく。

3.3. フィールドの概要

本研究では、日本のC大学の協力を得て、2022年の8月29日から9月2日まで行われたGDWSにTAとして参加し、参与観察を行うことができた。GDWSはこれまで主催校のキャンパスで対面で行われてきたが、2020年は新型コロナウイルスの感染拡大で中止となり、2021年からオンライン形式に切り替えた。2022年は日本のC大学が主催校で、台湾のN大学とT大学から学生を募集し、オンライン形式で開催された。

4. 断片の分析

本稿では紙幅の都合上、参加者の共創とセミオティック資源について、「デザインの知識」と関係するものの一部を取り上げて説明する。

GDWSの参加者はすべて大学のデザイン関係の学科に所属している。そのため、日本と台湾の参加者の発話から、デザイン学由来の表現が多く見られる。今年のGDWSの共創では、日本の教員が考案したやり方（ワークシートなど）が使われており、8月29日と8月30日に、日本の教員によるやり方についての説明が、計2回行われた。そして、8月30日の午後2時17分、日本の教員はSlackで全体に向けてワークシートについて追加説明を行い、説明の最後にDouble Diamond (Design Council 2005) について、参考のリンクを貼り、「Do you know the method called Double Diamond? You can check the article attached to this post」とアドバイスした。その後、台湾の参加者専用のチャンネルでは、台湾のT大学の教員による追加説明も行われた。14時36分のポストでは、台湾の教員は説明の最初に「I先生提供的「Double Diamond」的方法，也就是我們在設計流程中習慣操作的『發散－收斂』。（I先生が提供した「Double Diamond」という方法は、私たちがデザインプロセスでよく使う『發散－收束』である。）」と説明した。実際、台湾の教員が説明を行った午前のデータから、「發散－收束」について言及した参加者がすでに存在していた。

そして、断片は、9月1日の録画データから記述したものである。この断片では、TW_YYは、発想について自分の意見を日本の参加者に伝えようとしている。観察対象グループのやり取りで多く使用される「Big」「Small」という二つの英語資源は、「發散－收束」の概念と関係している発話である。

断片

...		一部省略
10	JP_R	yeah I uh how, uh:: yeah uh how will to:: to () yeah, uh how will make
11	TW_YY	like the way we make yesterday ↑ [like this
12	JP_R	[yeah yeah yeah yeah=
13	JP_R	=but but uh::: this is too big and too more too more uh:: information
14	TW_YY	um:: maybe that we have find the information here in taiwan right and maybe we can e:: 分解怎麼講 "分解って何っていうの?"
15	TW_SY	分解

16	TW_YY	umm maybe we can break down for the small topic inside
17	JP_R	ok
18	TW_YY	maybe and the topic will not bigger and bigger and it will be smaller smaller hhhh 你們聽得懂我在講什麼嗎 我自己都聽不太懂 “私の言っていることわかる？自分でもよくわからない”
19	TW_SY	聽得懂啊聽得懂啊 “わかるわかる”
20	TW_YY	oh
21	TW_SY	of course
22	TW_YC	你要說什麼 “なんか言おうとした？”
23	TW_YY	→ 就是 umm sorry i speak in chinese for [TW_YC= “つまり”
24	JP_R	[yeah i have no problem
25	TW_YY	→ =and maybe she can use different way to speak for you
26	JP_R	um yeah
27	TW_YY	→ 就是 uh 今天不是有找了很多 [就是那三個人口外流然後學業程度落後= “それは uh 今日はたくさん見つけたじゃない。人口の移出と教育レベルの低さについての三つのあれ=”
28	TW_YC	[um
29	TW_YY	→ =跟傳統文化消逝這三個東西裡面的 stakeholder [跟 player 嗎但 [是因為我們= “=と伝統的文化の消失、この三つの中のstakeholderとplayer? でも私たちは=”
30	TW_YC	[對”はい” [對”はい”
31	TW_YY	=現在要做成網路圖 所以我們 [不能讓他越來越大 [就是 不能讓他發散= “=今、マップを作る必要があるから、[あれを段々大きくさせることはできない、つまり、 発散させちゃいけない ”
32		[對”はい” [對”はい”

10行目では、JP_Rは「how will make」とたどたどしい英語で質問して、TW_YYは「like the way we make yesterday」と返答した。TW_YYの返答に対して、JP_Rは「but this is too big and too more too more uh:: information」と指摘した。JP_Rの指摘に対して、TW_YYは、16と18行目で、「maybe we can break down for small topic」と「and the topic will not bigger and bigger and it will be smaller smaller」。この一連のやり取りの中、JP_RとTW_YYは、「big」「more」「small」などの英語資源を複数回用いて、アイデアのまとめ方について説明しようとしていることが観察される。しかし、「big」「more」「small」などの単語はただの英語資源ではない。22～32行目では、TW_YCはTW_YYが英語で説明したことについて「なんか言おうとした？」と質問して、それに対し、TW_YYは31行目で「現在要做成網路圖所以我們不能讓他越來越大，就是，不能讓他發散（マップを作る必要があるから、あれを段々大きくさせることはできない、つまり発散させちゃいけない）」と中国語資源で説明する発話から、TW_YYは「big」「small」などの英語資源を用いて、デザイン学における「発散—収束」の概念を表現しようとしていることがわかる。「big」「small」は英語資源でありながら、台湾の参加者の発話で使われている「大的主題（大きなトピック）」という中国語資源とも関係している。さらに、台湾のデザイン教育で使われている「発散—収束」の概念、日本のデザイン教育で言う「Double Diamond」、Miroで作成したマップの大きさなどのセミオティック資源と切り離せない関係性を持っている。

5. まとめ

本稿では、「デザインの知識」と関係する断片だけを取り上げて紹介したが、観察対象の共創はWebexを通じて行われているため、「Mrio(オンラインツール)の付箋」「カーソル」などの資源にアクセスしながら、共創を進めることも観察された。GDWSにおける参加者の共創は、言語資源だけでなく、その場にある資源やデザインプロセスと深く関係していることがわかった。メトロリンガリズムを援用した分析を通じて、これまでのデザイン領域の研究ではあまり議論されていない言語資源とデザインプロセスの関係性について、その場にある様々な資源も含めて議論することができたと言える。

また、本研究の分析を通じて明らかにされたことはほかのフィールドにも通用されるかどうかはまだ不明であるが、言語資源と様々な資源の絡み合いに注目する研究を積み重ねることで、一般化できるものが見出される可能性が高くなると思われる。これによって、参加者が多種多様なセミオティック資源にアクセスできるように、デザインプロセスを考案し、共創の環境を整えることができれば、より多くの人々に参加してもらえるようなGDWSの企画ができると考え、今後の課題とする。

謝辞

本稿は、慶應義塾大学大学院に提出した2023年度の学位論文の一部をもとにしている。本稿の執筆にあたって指導教官の杉原由美先生から有益なコメントをいただいた。深謝致します。千葉工業大学の長尾徹教授と稲坂晃義准教授が参与観察することを認めてくださったことにより、この研究を行うことができました。深謝の意を表します。

参考文献

- Council, D. (2005). The ‘double diamond’ design process model. Design Council, 2, 1.
- Design Council (2019) 「The Double Diamond: A universally accepted depiction of the design process」 <https://www.designcouncil.org.uk/our-resources/archive/articles/double-diamond-universally-accepted-depiction-design-process/#:~:text=The Double Diamond is a,of methods and tools used> (閲覧日: 2022年8月30日)
- Goffman. (1975). Frame analysis : an essay on the organization of experience. Penguin Books. pp.10-11.
- Gumperz, J. J. (1981). The linguistic bases of communicative competence. In D. Tannen, (Ed.), Analyzing discourse: Text and talk (pp. 323-334). Washington, D. C.: Georgetown University
- Pennycook, & Otsuji, E. (2015). Metrolingualism : language in the city. Routledge. <https://doi.org/10.4324/9781315724225>
- Pennycook, A., & Otsuji, E. (2014). Metrolingual multitasking and spatial repertoires: ‘Pizza mo two minutes coming’. Journal of Sociolinguistics, 18(2), 161-184.
- Watanabe, S. (1993). Cultural differences in framing: American and Japanese group discussion. In D. Tannen, (Ed.), Framing in discourse (pp. 176-209). New York: Oxford University Press.
- 千葉工業大学 (2020) 「新型コロナ禍の世界……………対面の意味は？代替手段は？」 https://www.it-chiba.ac.jp/cit_news/media/201215/topics3.html (閲覧日: 2022年6月30日)
- 尾辻恵美 (2016). メトロリンガリズムとアイデンティティ: 複数同時活動と場のレパトリーの視点から (特集 アイデンティティ研究の新展開). ことばと社会: 多言語社会研究, (18), pp.11-34.
- 尾辻恵美 (2021). 第二の言語イデオロギーの転回におけるメトロリンガルの強み. Heinrich, 宇都宮裕章, 義永美央子, 尾辻恵美, 熊谷由理, & 佐藤慎司. ともに生きるために: ウェルフェア・リングイステイクスと生態学の視点からみることばの教育. 春風社. pp.106-134
- 東南裕美, & 安斎勇樹. (2020). 観光まちづくりにおけるデザイン・ワークショップの提案. In 日本デザイン学会研究発表大会概要集 日本デザイン学会 第67回春季研究発表大会 (p. 298). 一般社団法人 日本デザイン学会.
- 武蔵野美術大学 (2023) 「国際ワークショップ「Global Design Initiative 2023」の参加者・学生サポーターの募集について (追加募集: 1/15締切)」 https://www.musabi.ac.jp/news/20221223_03_04/ (閲覧日: 2022年6月30日)